

優秀賞

私はそんな人になりたい

山形県南陽市立宮内中学校

二年 太田 珠 伽

「じいちゃんの人生は太く短くだ！」と豪快に顔をくしゃくしゃにして笑いながら、私と姉の頭をなでてくれていた祖父が大好きでした。とてもおおらかで優しく、いつも公園や映画、山にプールと何処にでも連れて行ってくれた祖父。そんな祖父が病氣だと知った時、私はまだ小さくてその事を理解できませんでした。けれども会いに行くのがいつからか祖父の家ではなく、病院になったことは幼いながらに印象に残っていました。

祖父は白血病でした。生存率が低い病氣に急に襲われたのに、最後まで仕事を誇りに生き抜いたのです。商業デザインをしていた祖父はとても職人気質で、「おじいちゃん」ではない時の顔は難しい人だったようです。病氣になってからは入退院を繰り返しながらも仕事を続け、さらに作品が一つでも多く残るようにと一日一日懸命に作品づくりに取り組んでいました。もちろん、私達姉妹には病院ではベッドで楽しい話をしてくれたり、退院後もいろいろな所へ遊びに連れて行ってくれたりしました。

ある日、自転車の補助輪を外して乗るため、祖父と公園に行くことになりました。練習しても全然乗れる気配がなくて自分に腹が立ち、家族に当たり散

らしていた時だったので、こっそり祖父に特訓してもらいたかったのです。でもやっぱりその日も乗れず、祖父母に当たって大騒ぎしていました。「そんなに泣いていると泥棒さんに連れて行かれるぞ！」と泣いている私に祖母が言う横で、祖父は「まあ今日乗れなくても明日は乗れる！ 明日は乗れる！ 乗れる！」と公園に響き渡るほどニコニコしながら言ってくれました。今思うと根拠のない言葉でしたが、それでもなんとなく明日は乗れる気にさせてくれた祖父でした。

映画では祖父の好きなアクションではなくアニメを観に行くと、隣でいびきをかいて堂々と寝ている祖父。普段行かないお洒落なご飯屋で横文字の商品を頼む時、囁んでちゃんと喋ってないのに頭をかきながら笑顔でごまかしオーダーしている姿が、私達姉妹に愛情を持ち、とても大事に育ててくれたのだと今強く思います。

そんな祖父ですが、辛い治療の後、仕事と私達孫と遊ぶことで元気をもらっていたのだということを祖母から聞きました。私達が知らずに過ごしてきた楽しい何気ない時間が次の日も、次の月も、次の年も続いてはしなかった……と私は今にも思っています。私達姉妹と笑って過ごしたための時間を大事にしてくれた祖父のことを考えると、感謝の気持ちでいっぱいです。

四月一日、祖父は天国に行きました。お葬式の日、祖父の友人が「エイプリルフルに嘘のように行っちゃったな……まさにあいづらいな。」と笑っていたという話を聞きました。

私はこの話を聞き「おじいちゃんはスゴイな！」と思いました。最後まで祖父は豪快でユーモアに溢れ、エイプリルフルに台風の如く去って行きました。それでも残された私達に笑顔を残していつてく

れたことは、悲しいことであっても最後まで笑顔に変えることの大切さを教えてくれたように思います。

祖父が亡くなり時間が経過していろいろなことが薄れていき、思い出も遠い昔のように感じながら毎日を送っています。しかし町には祖父の残した作品がたくさんあります。今それを見ると、当時祖父と一緒にいた時には感じられなかった感動があったり、祖父が生きていた存在を今も感じたりすることができ、こんなに素晴らしいことはないと思います。辛い治療をしながらの仕事は想像を絶するものだったと思いますが、祖父の作品が残り続けているのは、責任や誇りでつき動かされるように仕事をしたからだだと思います。そんな祖父の面影を思い出した時に、最後まで頑張った祖父を心から誇りに思います。

これからの私の未来に待っていることは楽しいことばかりではないはずです。いろいろな場面ですまざった時、どうして祖父は頑張れたのかを考え、自分はどう頑張ったら良いのか、自分次第で変わるはずだと信じ頑張っていきたいです。さらに、人が困っていたり、悩んでいたりと、まずはその人を笑顔にしたいです。どんなことが幸せなのか人それぞれ違うけれど、私は祖父のように豪快に笑える人になりたいと思います。

そして、最後の最後までユーモアに溢れ、やりがいのある仕事をし、これから先出会う人にも「あいつは面白いやつだったよな。」と思ってもらえるような自分になりたいです。そのために毎日すべきことを明確にして前に進もうと思います。

私たち2年生は職場体験があり、その準備期間中に私は将来のことを考えることができました。これからどうしたいのかと自分自身と向き合ってみたことで、生きるとは、働くとはどういうことかを考えてみたことをテーマにしました。

作文を書くに当たって